

# 真 生

## 第六卷第三號

□私共が此の世に生存してゐることは何の疑ふ可き餘地もない。然し乍ら、吾等は如何に生く可きかと云ふならば、そこには大いに考ふべきものがあるのであります。

□「人はパンのみにて生くるものにあらず」とキリストが云はれたが、まことに人はパンのみでは満足が出来ぬものではありません。釋迦も孔子も等しく此の心の持主であつたのであります。

□パンは肉體の生命をつなぐには大切なものであります。然し乍ら私共の心の生命を眞に生かすものはパンそのものではありません。パンは私共が神に生き、天に生き、佛に生きる爲めの肉體の糧に過ぎぬ。

□然らば其の佛とは何であるか、天とは何ぞ、神とは何かと云ふならば、私達はこれを、釋迦、孔子、キリストの心の上に始めてそれを見るのであります。孔子が天を祈り、キリストが神を念じ、釋迦が佛となられたと云ふことは少くとも、私共が大いに反省すべき所でありませぬ。

□生ける人々とは正にかくの如き人々をこそ云ふべきでありませぬ。そこには永生の光輝き、價値の生命が躍動してゐるのであります。人類の爲めに、眞に誇るべき獻身の大業がなされてあります。

□されば友よ、私達は今やパンのみにて生くべきのときではない、よろしくそこには眞に自らを永遠の生命に生かしめ、限りなき價値の生活に自らを立たしむるものでなくてはなりません。

# 目次

- ◇ヨク漬かつた人間……… 越 子
- ◇阿彌陀佛の信仰に就て……… 土屋 觀道
- ◇だれでも一つの寶を持つてゐる 佐藤 忠義
- ◇不死の自覺の第三期……… 山口 常照
- ◇吾明使り………

# ヨク漬かつた人間

◇本當に大根一本でさへ味噌樽の中へ突つ込んで置けば、味噌漬になります。

◇それにお慈悲の中に在るさか、信仰の中に生活してゐるさか云ひ乍ら、なぜお慈悲漬かりになり、信仰漬かりにならないのでせう。

◇一體「漬かる」とはさういふさか。それは大根が味噌の中へ突込まれて、大根の鹹味や苦味が灰汁ぬけて、その代り味噌の味が入り換はり、味噌臭くもなくなり、かといふて大根鹹くもなくなり、二つが調和して渾然一體、微妙の風味となつたときに「ヨク漬かつた」といふのです。

◇信仰に入つて信仰者らしい臭みもなく、かといふて灰汁ぬけのして居らぬ辛ひ人間でもなく、鹹い奴が如來さまのお慈悲で、鹹いままで程よい加減の鹹さにして貰ひ、徳者振つた厭味もつかず、恰度さちらへも傾かぬ無味になつたとき、それが信仰の醍醐味だと思ひます。ワザさらしい信仰賣り屋も厭です、かといふてガリんの慾深でも居りたくない、本當の「信仰者」、本當の「人格」者になりたいものたさ泌々思ひます。

◇人を引き附けたいさいふやうな下心を持つてゐる人にはさうしても引附けられて行きません、本當の自然人、無我的人、無味のの人にこそ知らず識らず引附けられて行きます。「弟子一人も持たず候」と云はれてゐた眞鸞上人にして、初めて誰の弟子にもなつて居り、誰をも弟子にしてゐた人であります。

◇もつと腹の大きい、モゲタ人間になりたい、一切を抱いて、一切の上に生きてゆける人、それを「佛」、信仰人さといふのでせう。そして此の人格の中からこそ眞實無我の大道が出來て行きます。宗教は社會運動だ云ひます然し人格の出來て居らぬ者がされたい社會運動を初めても皆駄目です此の人格の出來上り此の人格に向上して行かざる求道の中からこそ、初めて社會運動も意義をなして來ます。だから飽々宗教は人格完成が中心だと思ひます

◇我々の眞生同盟も此の個人完成、社會完成の向上運動であります。(越子)

▽空の飯櫃を水の上に浮かべた儘、グツグツ水の中へ押し込まうとしても却々這入らぬが、飯櫃を一寸横にかせば直、水がガバツと這入ります。

▽私達も自分の我を張つてゐるまゝで如來様のお慈悲を知らさして貰ひたいものたと思つてゐても、お慈悲の水は這入つて來ない、自分自身を反省し改めるとが無く、家の者が悪い、店員が働かぬと云つてゐても、却々皆の者が良くなるものではない。自分に反省し、自分にも悪い處が有つたさ頭が下がり、改めてか、つた時に、初めて周囲の人々も善くなつて來ます。

▽即ち自分の方から折れて出たとき水の方から這入つて來る、折れて出るさかとは歸命するさかでありませう。本當に歸命したとき、如來様の方からお慈悲を知らさして下さる、お慈悲が私達の内に一杯詰まり、愛が張切つて來ます。

▽然し「内應に充ちた」だけのお慈悲では「こぢり使つて了へば失くなりませう、飯櫃に這入つた、けの水では酌み出せば無くなつて了ひませう。眞實お慈悲を戴くさかこは如來様の方でポイント「自分」といふ飯櫃の底を下から抜かれるさかでありませう。

▽今迄張つてゐた「我」といふ下蓋板を一枚打ち抜かれるさか、初めて本當の如來様のみ恵みさかさが那々湧き上がつて來ます、内外透徹して信仰の大自然に生かされます。自分さか消へ、如來様さか消へ、眞に宇宙に躍り出て、宇宙を我れとして生きられます。此の活信仰に生きるまで歸命せねばなりませぬ、此の活信仰に生きてこそ眞實の歸命が出來ます。

# 阿彌陀佛の信仰に就て

土屋觀道

私は嘗て佛教の何ものたるかも知らずして、随分勝手な批評をあれこれとしたものであるが、かゝる批評は今日の人々にも尙ありがちなことである。乍然かゝる批評は得て自らを誤まり、又人をも誤まるのである。従て私は初め佛教とさへ聞けば死後の地獄や極樂のこのみと思つた。然し之は私の生れた里が主として他力教の教のみがあつたがらである。然るにやゝ長ずるに及んで、禪宗と云ふものがあり、之は此の世で悟りを開く宗旨であると云ふことを知つた。そこには他力教のやうな阿彌陀佛や西方淨土に往生せなくとも、此の世からなる永劫の悟りの世界に到達することのできるものもあると云ふことを、おぼろげながら知るに至つた其後西方と云い、淨土と云ふのも、必ずしも私共の今日考へてゐるやうな地球上からの西方でないこと云ふことを知ると共に、其の世界に往生すると云ふことも、要するにそれは私共がやはり禪宗のやうな自分の悟りを開く爲めであると思はされた。従て、若し吾々に西方淨土に往生せなくても、此の世に於て各自に悟りを開くことができるものならば私共は必ずしも他力教でなくともよいと云ふことを聞かされた。否、それどころか、本來釋尊の教へは寧ろ自力教を主とし、中心としたものであつて、少くとも釋尊並に釋尊の直弟子たちは主として聖道門の人たちであり、其後の數百年と云ふものも殆ど他力教と云ふものはなくて、自力教のみが行はれ、又勸められたものであつたことさへ聞いた。而もあらはに淨土教としての他力教が一般に説かるゝに至つたことは八宗の祖師と云はれる龍樹によつて始めて勸められたことであり、それにしてもそれは此の土に於て悟りを聞くことのできない、下劣下根の人々は阿彌陀佛國に往生して悟りを開くと云ふやうな意味が漏らされ、未だ一般に主として勸めたものではない、従て龍樹自身は自ら聖道自力の法門を信仰し、他の人々にも之を主として勸めたのであつて、淨土門の教へは其の傍に之を一部の下根下劣の人々の爲めに説いたと云ふに過ぎないまして淨土門が聖道門以上によいものなどと云ふことは少しもその中には見えない有様である。

其の後、自ら佛教を研究するに従つて、たゞい淨土教が隆盛になつて來たとしても、而も何れの時代と雖も、聖道門としての自力教が悪い宗教だとか、つまらぬ宗教としての取扱つた人は殆どない。而してそれが聖道門の人々にあろうはずもないが、聖道門を捨て、淨土門に歸したと云ふほどの人々にさへ、それがないと云ふことは最も注意すべき事柄であらう。否、それどころか、たゞい其等の人々までが聖道の法門を此の上もない尊い經典として賞讃しないものゝないこと云ふことは更に注意すべきことである、だからして若し聖淨二門の中、私共の力がその何れにも堪え得るものとしたならば勿論淨土門を捨て、聖道門に赴くのが正當であることさへ思つたのであつた。故に淨土門に歸する所以もやがてはまた聖道門の云ふ解脱の所にまで進むと云ふことが寧ろ佛教本來の理想であり、目的であつた。

## 二 釋尊の成道の第一義

以上は佛教の思想を觀察するもの、等しく認むるところであるが、今その原因を考察すれば、これは主として釋尊出世の成道に於て之を明に示すものがある。云はねばならぬ從てこの論法から押して行けば一切の諸佛が成道せられた原理も、其の根本の原理に於ては一轍であり、又私達一切衆生が成佛を目的とするのも亦等しく此の釋尊の成道を根本基軌としてゐるのである。然るに釋尊の成道は從來の有神論を捨て、自ら佛陀となり、無上土となり、最上尊として天下に君臨したのであつた。從て多くの佛弟子の理想も亦、釋尊と等しき佛陀となり、無上土となり、最上尊となることにあつたので、たとへ釋尊の人格を慕い、釋尊の人格を尊敬することは恰も絶對尊に接するが如くであつたとしても、それは決して其の人に恐怖し、或は威服した、下僕の如き卑しき態度をとるのでは無かつた。即ちそれは自分の理想人として、自分も亦その釋尊の如き人格に早晩は達せられるものとして、之に接したことはもとよりである、從て從來の婆羅門の如き有神論的信仰ではなくして一切人類の正に到達し得べき所の理想人としてであつたことは私共の特に心得置くべき所である、從來の神は天地の主たる神、世界を支配する権力者と云ふやうな自己の上に君臨する支配階級に屬する神であつたが、釋尊の成道は正しく之等の階級を超越した、萬人の到達すべき人類最高の理想人であつた、而も此の理想人こそは正しく一切の生とし生けるものをして皆悉く此の地に來たしめやうとする釋尊の大慈悲である、即ち一方には萬有の根本生命と融合して、一切の智者たり、慈悲者たる絶對人格の體現

(4)

者であると共に、一面には一切人類の理想人であつた。故に佛教の理想は主として、此の意味に於ける釋尊を中心とし、理想として、又自らも佛となり、佛の生活を顯すと云ふことがどこまでも貫いてゐる、殊に聖道門では此の傾向が強いのであるが、自分にはそれか到底できないとして、淨土門に入つた人までが、その究極目的に至つてはやつぱり自ら其の根本に於て、自己の正覺を豫期し、其の結果たるや、やはり釋尊の如く又釋尊に等しく、無上正覺の佛陀とならうとしてゐるのであつた。之れ即ち一切の佛教殊に一切の大乗教徒が聖道門の生活を其の中心とし、又之れを理想として、其の生活を最も尊しとした所以である。

然らば何故に淨土教は發生したか、已に淨土教徒までが聖道門を讚美するほどならば、はざ／＼聖道門を捨て、淨土門に歸する必要はないではないか、殊に淨土門に居りながら聖道門を賞揚する位なら、何ぞ淨土門を捨て、聖道門に行かないのか、之れ多くの人々の一般に疑問とする所である。そして又之れが、ともすれば多くの人々に淨土門が元氣なく、聖道門が元氣あり、そして又多くの人々、殊に多くの青年有識の人々に、ともすれば淨土教が嫌はれて、聖道自力の法門が賞讚せられやうとする所以である、而して又、之れを多くの史上に見るも、聖道門の教へが先きに現はれて、淨土教が其の後に現はれて來たのも其の原因は全くここにありと云ふべきである。

夫にもかゝわらず淨土教がどこに生れて來たことは又必ずそこに發生の理由がなければならぬ。

## 三 淨土教の發生

或る學者はこのことを佛教史上に照し、或は教理發達の上に眺め、或は神話の混入、若くは他教の混入であつて、佛教の眞説でないことさへ云ふものがある、それには尙幾分の証據もあり又それらの中には幾分の道理もあるが、それはとにかく淨土教が佛滅後に於て大いに勃興して來たことは否むことのできない一つの事實である、而して昔の多くの人は此の淨土教は釋尊の當時、釋尊の金口から説かれたところの佛説そのものであると信じ切つてゐたものらしいことも多くの古人の之に對する信仰の態度を見ても明かである、それにもかゝらず、今日反つて之を佛説でないかに疑ふ人の多く出たことは、其の淨土教が釋尊の正説として一大勢力の中にある聖道門とあまりに相違する點があるからである。

乍然之は一つの學者の見解の誤りに過ぎないのであつて、寧ろ私共の眼には此の淨土教こそは反つて釋尊の眞説さへ見ゆるのである、従つて私は己に釋尊の當時に於て、釋尊自身に對する多くの佛弟子の中に己に自から此の淨土教としての芽ばへがきざしてゐたのを見る、否、更に一步を進むれば私は己に釋尊自身の中に今日の淨土教が顯はれてゐるのを見る、乍然斯くの如きは昔の人々は昔の風で之を知るも恐くは今日の學者には反つて夢にだにそれを信するものはないかも知れぬ、乍然私のねらひは寧ろそこにあると言つてもよい。

乍然それは暫く別として、己に多くの佛弟子が釋尊の偉大なる人格に觸れて、釋尊の絶大なる人格の感化を受けたことは事實であらう、そして又其の人格を通じて現はれて來る釋尊の身口意の説法が自から其弟子

に對する無上法としてひゞき、又彼等はそれによつて、偏に釋尊と等しき無上正眞道に立つこともできるのだと信じたに違ひない、然るに一度び釋尊の入滅に接するや、教團は忽ち其の中心を失つた、茲に於て佛弟子中、或は釋尊生前の教法を何よりの所依とするものも起るであらうし、又其の中には釋尊の人格を追慕して其の御姿を思念して之を中心に生きやうとするの輩もあつたに違ひない、中には印度人の習いとして、多くの偉人は間もなく神話化せらるゝ傾きあるところから、又、釋尊の如き偉人がそれにならつて色々に神話化せられて、後人の崇拜となつて來たことも亦止むを得ぬと云はねばならぬ、而して之がやがては釋尊の本生談として種々の前生物話などが業の思想と關係して起つて來ることになり、又一方には諸佛成道の信仰から他方國土に往生するの思想となり、遂には彌勒の信仰となり、阿彌陀佛への往生思想ともなつて來たことも云へる、然らば阿彌陀佛の信仰は己に佛弟子の間に發達して來る思想体系であると云ふこともできる、そしてまた私もそれであつてもよいではないかと思ふ、而して、それが當時の釋尊には全々知られかつたことであつたとしても私共の信仰には全々關係しないことがらである。

乍然それだからと云つて阿彌陀佛の信仰が虚偽だと云ふのではなく、むしろそれによつて眞實の宗教が自づからそこに發生して來たと見ても差支へないのである。

#### 四 阿彌陀佛の信仰

何となれば今、私共は此の阿彌陀佛の出現、殊に大無量壽經に現はされたる阿彌陀佛の信仰は眞に私共を

して、之れこそ眞の宗教として私共の心の無限の理想を新に展開してくるものがあるからである、其の一は法藏菩薩の本願によつて、私共の人類の理想を永劫に展開してくれると共に、又そこには全く私共の永劫に救済せらるべき宗教の本質がまごかに顯現れて吾人を常住に攝取するものがあるからである。

即ち前者に於て私共は法藏菩薩の發願が全く私共の本願であつて、私共の理想本願は又、全く此の法藏菩薩によつてのみ寧ろ新たに開顯せられるからである即ち法藏菩薩の本願によつて、私共自身の本願を知り、又之を聞くことによつて私共自身も亦かくの如きの心ともなり、自らの本心の願が根本の要求となつて強烈に喚起せられて来るからである、而も私共の救済せられるとしての阿彌陀佛は、如何なる罪惡と生死との人々をも問はず悉く無限の濟い主となつて頂くばかりでなく、それが直ちに私共の本願としての理想の阿彌陀佛であるからである。

加之、私共のやうな下根下劣にして到底自分の力では解脱することのできないものが欣然として此道に入ることができ、又その結果としては聖道自力の人々にも劣らず、否それにもまして私共が慈光の中に悠々と進みうると云ふことは到底聖道門の及ぶ所ではないからである。

尤も私共が他力教に信仰をもつやうになつたのはその初め決して深い信仰の内容あるものではなかつた、然し乍ら、夫れでも永生不死の要求と無限向上の完成の爲めであつたことは勿論である、乍然之を今日の私の信仰内容の上に眺め来る時、私は私ながらも、かくまでに信仰は進歩し向上するものであるかに驚かざるを得ないものがある、而もそれか主として阿彌陀佛を中心とせるこの念佛の信仰によつて、さうした變化があつたと云ふことは更に驚くべき事實であると云はねばならぬ。

然も私共の理想が永遠の生命に生き無限の向上に立つと云ふこと己に度々云つた所であるが、しかも其の生命の内容、向上の意義を眞に明にしたのが大無量壽經に於ける法藏菩薩の理想内容そのものであること、私は大經に於ける法藏菩薩によつて知らしめられたからである、そしてまた、それが成就せられたものとして阿彌陀佛が私共の如き理想高くして然も其實現の力ないもの、爲めに設けられてあつたことは何と云ふ恵まれたる恩寵であらう、私共は此の經與の中に含まれたる思想信仰の内容が己に宇宙の本佛たる阿彌陀佛の大悲の現はれである外に道がない。

### 五 理想の宗教

而も、これらの傾は己に如何なる宗教にもその芽ばねをもつものではあるが、それが最も完全に人類の生活の理想として一宗教に顯はれたものはこの阿彌陀佛の信仰である、本来人類の生活には此他力的方面と自力的方面との二つが充分に調和せられねば眞に生きて行くことはできないものを、それが時によつては自力的となり或は他力的と傾くのが常である、従つてそれが或る一方に傾ては他力教となり、或は自力教となり或は其傾きの程度によつて更に色々の宗旨、宗派となるのであるが、それは單なる一つの時代の影響、若くは民族發達の程度によつて違つて来るのに過ぎないのであつて、其究極の人類の理想に至つては決して二つないのである、だからして、一切の宗教は其人類の進歩發達に従つて、同一の理想宗教に相接近し向上して来るのである、而して其最後に來るものが即ち斯く云ふ私共の淨土教である。(一五、一一、二〇—二、三、八)

# 不死の自覺の第三期

仁川山口常照

## 序 餘裕ある生活

私は永い事、沈滞した生活、然らざれば、焦燥した生活を續けて來ました、そして反面にはもつと落着きのある餘裕ある生活を要求しました、鑿し餘裕ある生活とは、ヒマで遊べる生活ではありません、又黄金によつて恵まれる餘裕ある生活でもありません、世間の人は大抵、懐に金の多い人の生活を餘裕ある生活と言つて居ます、そしてそれをうらやむで居ります、私はさうした金に頼る餘裕の生活を求むるものではありません、成る程金がある程度までは落着きを與へてくれます、私も人間生活をして居る以上、金といふものを全然否定し様とは思ひません、自己の生活に必要なだけは様々出した心にかけて居ます勿論否定すべきは金に執着する我々の觀念です、たゞ茲で考へたいのは金のみによつては絶対の落着きといふものは現はれて來ないといふ事です、金にのみよる餘裕の生活は、雲上の生活の如く、薄氷をふむ不安の生活を免れない、そしてその餘裕は働かずして遊ぶ餘裕である、かゝる生活は要するに沈滞生活である、我々は此の沈滞生活を打ち破つて緊張した生活を欣びます、然してその緊張生活が焦燥気分を含んではなりません、緊張の緊張で後でグツタリする様な緊張であつてはなりません、我々の要求する生活は遊樂の緊張で

ある、眞の落着きある生活である、さらばさて落着きや、安落着きではない、要するに餘裕あるとは、絶対の安住地を求めて、何何なる問題にぶちあたつても、沈まず、焦らず充實せる價值の生活を執現する事である、而して我々は宗教的信念が此の餘裕ある生活を發つて呉れると信じて居ます。

## A 不死の自覺の第一期

然らば何にして、此の餘裕ある生活が現はれて來るか？先づ第一に我は宇宙を一つなりと信する事が其の根據である、我は決して單なる我ではない、我は宇宙全關係の上に生かされてあるものである、宇宙の現象は悉く宇宙生命の表現でないものはない、我も亦その宇宙大生命の表現である、而も大宇宙の生命は無始無終なる事は疑ふ餘地たない、たゞ有始有終と見るは現象のみである、それ我はその大宇宙生命の表現なるが故に大生命と一つである、大生命の滅する事なければ、我も亦不死である、不滅である、死ぬと見るは私の現象のみ、『我は大宇宙を一つなり、我れ死せず』と私は此の自覺に立つた時、一段の落着きを得た、此の自覺の世界から天地自然人間を眺めた時、一切は私の前に蘇生した、朝日を拜しても星や月を眺めても、松吹く風の音を聞いても、谷川の響きに接しても一切が涙ぐまじき程の親しきを感じた、一輪のスミレの花にも合掌し、キッスしたくなつた、そして今迄『自然は美しされ人間は汚れたり』と見て居たのが、人間の奥に生命の躍きを見た時、又合掌せずには居れなかつた、あゝ我は宇宙大生命の發動たこの上

## ◇吾朋便り

□名古屋にて 土屋觀道

只今崇徳寺様の一室で靜に此の筆を走りしてゐます丁度三月の原稿を書き終つたところで、其の原稿の清書に佐藤さんと伊藤さんご孝祐さんが御手傳ひ下さつてゐるところです、只今夜の時計が一時を打つて五分を過ぎました、而もかうして筆を私の嬉しさあらゆる道友の一人に向つて私の心は限りなき望み喜びと力さに満されてゐるのであります北越の友の熱心さあの雪中ものもせすして毎日に渡るあの多くの集會は私にとつてはむしろ限りなき感激の極みでありました、そしてまた三河の澁川性源寺様の集りは方丈様初め御一家の到らざるなき御厚志と集まる道友の主として青年を中心としたので初めての會合に似ず、之また近來にない成績で初めに次に三重縣五味塚榮照寺の集りは四年ぶりでの集りであつたにかゝらわらず昔のまゝのなづかしき道友そのまゝであつたのは涙もこぼる、嬉しきでした久々々の舊友の集りこそ又一しほのなづかしきです。その次の三河の法雲寺様の集りはこれまた初めての集りですが、

當地の人々にもさよりの之はまた近所近在の人々の心からなる集りは全く私の豫想を裏切る集りでした、昨日の晝の話には全く時間を忘れて三時間を打通し而もその中の聴衆の一人まで皆悉く熱心に、自己を忘れて聴いて頂けたことは、衷心からの喜びでした。そして又此の地の方面にも我が眞生の運動が生れさうです、尙三重の小杉の服部様での集りは當家御先代の命日を期して、兄弟一家が各地からの集りださうで、遠きは朝鮮東京などからわざわざ來られた方もあつて、其の聴衆の質に於ては、これまた申分のないのであります殊に、その御兄弟の皆様が何れも高等の教育を受けられその求道に御熱心なのさ、一家親しき御語りぶりとは、眞に私共の龜鑑とするに足るものと感心しました。次に申述べましたが、二月初旬以來の風邪も其後漸時輕快に趣き今では殆ど全快に近づいて居りますから乍他事御安神下さいいろいろと道友の方々に御心配や御迷惑なかけましたことを、衷心から御わびいたします

□私の日程、觀道  
三月十五日 東京發



はたゞ生命ながらに生きて行くのみならず、盡しこれ不死の自覺の第一期。

### B 不死の自覺の第二期

宇宙の大生命を直覺し、生命ながらに生きる事は、如何なるものにも優る尊い事ながら、それにも越してまた尊い事がある、それは第二期の自覺である、さらばさて第一期の自覺を不必要とする譯ではない、恐らく第一期の生命の上に立つに非ざれば、第二期の自覺も現はれぬであらう。又次に述べんとする第三期の自覺は第二期に比して尊き事ながら第二期の自覺なくしては現はれぬであらう、茲に三期に分かちて述ぶるのは、自己の進んだ境地を三期に別ちて表現した迄の事であつて優劣高低を論ずるのではありません。故に此の三は罪の足の如く一つを缺いても成立致しません、何卒これを讀んで下さる方は、此の點を注意して讀んで頂きたい。

それ第一期の自覺に於ける、我の不滅は、犬も猫も、花も石も、草も木も、皆同じく不滅である、斯く考へ來る時、不死の自覺の喜びも頓に興醒めて馬鹿らしい感さへ起るのであらう、茲に於て第二期の不死の自覺に進まなければならぬ、抑も宇宙生命の表現として現はれ來りしものには、各々使命といふものがある様である、太陽は太陽としての使命あり、空気が空気を以ての使命あり、此の外、世界にも、國家にも、水にも、石にも、花にも木にも、皆各々使命といふものがある様である、然らば人間の使命は？果我の使命はどこにあるのであらうか？私は此の疑問から次の解答を與へられた。

「人間の此の世に生れた使命は、大宇宙の愛と法則に順應して、生命ながらに、永生向上、自由の價値の生活を体験し人各々時處に即して全人格的に活動して、宇宙をしてその本性たる、眞善美を自由に十分發揮せしむる所にあり」

私は此の私に與へられたる解答は全人類の全目的であると思ひます、然るに私どもは、多もすれば、かゝる尊き人類の使命を忘れて、たゞ徒らに肉慾や財慾や名慾に囚はれて、多くは之を以て人生の目的なりと誤認して尊き使命を見逃して來たのであるまいか、私は此の解答を與へられた時、全く蘇生の思ひをして、茲に我が生き甲斐ありと痛感いたしました、更に此の使命を感得し得るものゝみ眞生の人である、不死の自覺を體驗するものであると、歡喜法悦の生活にひたつた、此の生活の裡から更に人間を観察致しました場合第一期の自覺の時以上、人間が輝いて見えました、それ迄は無量壽經の法藏比丘及其その本願が解らなかつたが、此の時初めて法藏の人格及本願を確信し得る様になつた、私は此の人格の發見を見佛と言つて居ります、故に世間では見佛と言へば幻覺の錯覺だの議論をして居るが私の見佛はそんな議論ではない事を斷言したのであります、かくて私は他力本願仰信の念佛を稱へさして頂く様になりました。茲に第二の不死の自覺を述べ終るに當りて注意したいのは、人類の使命を忘れて肉や金や金の慾に囚はれて居たからして、肉や金や名を全然捨て、使命のみに生きよと言ふのではありません、使命の遂行は慾の世界を捨て、は不可能であります、故に使命のもとに慾望を生かす事であります一寸一附加して置きます、かくして人生は又一段と喜びと落着きを得た、盡しこれ不死の自覺の第

- 同 十六日 大阪豊田樓
- 同 十七日 同北市民館
- 同 十八日 尼ヶ崎圓平寺
- 同 十九日 神戸
- 同 二十日 名古屋豊樂寺、夜梅香院
- 同 二十一日 崇徳寺

□名古屋にて 中野善英  
一味の三月號が刷り上がつて居らぬのかと佐藤様のお店へ立ち寄りして頂いたら、一味よりも眞生へいづも傾りが絶え勝ちだから、先づ原稿から先に書けといふ注文でお客様が却て注文攻めになつたやうな始末です。眞生といふ一つの大きな根幹からあちらこちらへ新芽をふいて伸々其雄を競ふてゆく様を見ることが本當に喜ばずには居れません。生あるものはいくら地の中へ埋めて置いても必ず新芽をふきます。此大地の中に根を張つてみえる如來様は斯く新しい幹として、私達を生じて下さいました。そして各自に獨特の華を咲かしめ、各自に夫々の事をさして下さいます。そこに各々ほどの様に違つてゐても違つてゐる、儘く一つの使命——如來のみ業へ果して、ゆくのでした。本當にめい／＼が各自の形で全分を盡したい。氣分がしてなりません。今から

直ぐ汽車で越後の方へ發ちます。本當に私達は生きる世界が廣くなりました。

□彦根高商 校寄宿舎、寮友會より  
謹啓時下寒氣や、薄らぎ申候。先生益々御勇健にて御奮闘の段、奉慶賀候。毎々眞生誌御惠送被下候段、雖有深謝仕候。御高説拜誦、眼のあたり御教導に預り居る感致候(後略)

□大阪市 米田傳司様より  
濫川よりのおたよりありがたう御座いました其後少々およろしいとの御事、何よりの喜びしい事と存じます。

二月號眞生、昨夜全部發送いたしました。次から二十三部餘分に御送り下さいませ、これから少し愛讀者を増して見ようと思ひます。誌代等の控がありましたら御送り下さいませ大分未拂者が多い様ですから、私の方だけでも整理したいと存じます。私共の手にて出来る事は御遠慮無く申付下さいませ。

□佐屋 瀧澤護様より  
茲一兩日亦お寒さが加はりましたが、御上人様には別して御變りも御座います御精進下さいませが御案に申し上げます。お席御暖りの暇もなく年頭早々から御法の爲めに私共を御導き下さいます事をありがたく遙かに尊き御



### C 不死の自覺の第三期

私は第一期の自覺を通じ、第二期の自覺を通じてされた喜び且つ勇んだか知れませんが、この時を経過するにつれて、感激の光りも漸次薄らいで行きました。その結果は、自覺せる使命に危険があるのではないかと疑ひさへ懐く様になった、のみならず自分は自覺したさいふ使命をされは果したかを反省した時、自己の無力なのに泣かざるを得ませんでした。使命を自覺し乍ら、之を體現すべき事の努力を怠つて居る事に気づき、前愧懺悔の念に堪へませんでした。懺悔の念佛を申さずには居れなくなつた、而して懺悔するだけでは消極的であつて、積極的に自己の内心の満足は得られませんでした。かくて法然上人の御法語に

「阿彌陀佛の本願は一念に一度の往生をあておき給へる願なれば念毎に往生の業となるなり」

と、あります。此れにヒントを興へられて、一道の光明がさして来る様に思はれて参りました。思ふに第二期の生活では、たゞ使命に気づいた事を喜んだだけの生活で、また自分の生活も使命がピツタリしない、恰も度の合はぬ眼鏡をかけた様なもので生活がシツクリしない、言はゞ使命が高い處に掲げられて、それを置かれて居たに過ぎない、理想追及の生活に過ぎない、だからよくこんな事を言つた、「今我々の自覺した使命はすぐそれが實

現さるべきではない、人間が漸次向上して行つたとき初めて實現さるべきである。故に我々はその期の近づくを待ちて一歩一歩努力し様」と、然し此の考へには大きな空虛がある。到底我が内心は満足しません、そこで百尺竿頭、自覺を一歩進める必要に迫られて、第三期の不死の自覺に這入りました。第三期に入つて初めて度の合はなかつた眼鏡の度がシツクリと合つた氣持になりました。

偕て第三期の自覺とは、第二期の自覺の使命も忘れたるが如く、此の使命を自己のものさなし切つて、朝起きる事から、御飯食する事、掃除する事、勤勞する事、勤勞する事、子供の教養をする事、寝る事、一日の働きの一擧手一投足が其の儘、その時、その時、使命を果遂する、最後に本願成就があるのでなくして、その都度その都度に本願成就があるのだ、換言せば、一日の思惟行動一切が第二期に示した人間の使命——人生の根本目的——の手段に非ずして、思惟行動そのまゝに使命の遂行である、手段とせずして目的として思惟し行動する、念毎に往生の業となる様に、一擧手一投足が目的の實現である、手段と考へる時、無駄が生じる、目的と考へる時、去留生活となる、此の生活にして初めて光明生活と言はれ眞生の生活と言はれるのである、(前月號の無駄なき生活参照) 思ふに第二期の生活には目的と實行とがかげ離れて隙間があつた、安心と起行とが相對的であつた、心行不二の生活となつて居なかつた、第二期に至りて、目的と實行との一致である、安心と起行とが絶對となつた。

此の境地に立つて再び法藏比丘、及その本願を眺め來りし時、「法藏之本願」と「自己

姿を拜ませて頂きつゝ、御念佛を申させて頂き居りますから御放心下さいませ。

清水の御集りもさぞかし御盛會にて御悅の事と御羨しく存じます。静かに御集を想いながら朝夕を念佛にいきさせて頂いて居ります、申なくれましたが先頃はお便りを下さいまして色々御導きを給はり厚く御禮申上げます。何事も私への如來様の御示しと歡喜し學ばせて頂きます、黒宮様も御變りありません。奥様も少し風の氣分でしたが今ではお達者です、いづれ近日中にお目にかゝれます事を喜んで居ります、まだはつきり定まりませんが名古屋放送局の依頼で大阪局で放送をさせて頂きます、期日は十八九日頃かそれすぎなれば二十六七日でありませう(後略)

□焼津町 北山忍良様より

先日は清水にて色々御指導を頂き難有く御禮申上候、次に其御依頼申置候二十七日夜五時より座談會と次で二十八日午後一時奉修追悼會の御講演決定候間再び御依頼申上候、二十八日午前中は清水へ先般参上せし連中が多分念佛修養致す様に相成るかぞ存じ居り候右御承知被下度御依頼申上候

□岐阜縣 山田淳藤様より

本年は殊の外寒氣盛しきも、御上人益々御健勝に御座被爲在。御傳道に御盡精、道友の悦び此上なく存候。(中略)御上人の御引立により、心より念佛精進の出來得る様になり、力だけに自己の信する處を、道友と共に進ませせて頂く事の出来るのを悦び申候。

□岐阜市 松浦重三様より

いつも失禮のみに打まぎますが御赦し下さい。眞生歸上にて、御上人様傳道日程拜見仕り、益々御活動遊ばされ候段奉慶賀候。それに引かへ、當地の道友を見るさき心淋しき感に堪へず候。それも要するに、小生の念佛深まらず、爲に活動足らざる事と、上人様に對しても心すまざる心地致し候。(後略)

□三重縣 楠村 八島七郎治様より

去る二十二日以來四日間、御別時に参加致しまして、御上人の御講話を、拜承致しまして、眞に如來の御慈光難有しき感と感ぜざして、頂きました家に歸りまして、家内諸共相たり相和して共に悦び勇みつゝ、少しにても、意義ある生活に進ませて、頂きました之れ偏に如來の御慈悲と存じます。(中略) 來る廿五廿六日は、榮照寺にて又々御目に



居ります。(中略)又五月の御光來を鶴首してお待ちして居ります。私は死んでもこのお念佛だけは申さずには居られませむ。

□相崎・渡邊ごせ子様より美知子へ

絶え間無く降り續きし魔の雪も、漸々晴れましてやつと夢からさめた様の心地となりました、其後いつも、御無沙汰ばかり致し居りました、なんとも申響も御座いません、時折は主人が參上致しまして御馳走様に預りなれども御禮の申様も御座いません、御蔭様にて私共一家は、御上人様御照しの光明に浴させて頂き、お念佛の中に朝夕を、眞に生かさせて預いて居ります、ほんとうに有がたう御座います。

此度は、有史以來の大雪の中を、殊に御上人様には御風邪に渡らせらるゝを、もいとはせ給はず、如來教化のために、私共の切なる願を容れさせ給ひて氣車不通の中を、わざわざ遠路御出下され、すぐれさせ給はぬ御身を寸暇の御休みも無く、永々御教化に預り、此の悦びと感激とは、さても、私共の機まはらぬ筆には、書きつくし得ません只々合掌あるのみで御座います。(中略)  
如來恩寵によりて、此度さいふ此度は私共日

頃の念願の通じてか、娘が非常に御上人様の血の出る様な御叫びに目ざめさせて頂き、一生の願ひに是非共、御上人様の御伴させて頂

### 行基寺別時三昧會案内

時 四月十一日より七日間前日ま

でに御登山のこと

所 岐阜縣海津郡城山村行基寺

(養老線山崎驛下車約二十町)

導師 土屋觀道師

行基寺の三昧會は眞生道友三大

別時の一つであります時恰も櫻花満開の頃山腹遠く人家を離る深く三昧の妙境に生さるには絶好の地であります皆様の參會をお待ちします

### 行基寺

き、しばしなり共此上親しく、御靈化に預り度いとの、切なる願により御上人様に御願申しました處、御快諾下さいまして、嫁入

る前非常に善いてあらうとの、御言葉に甘へ不躰ながら二人まで御同伴願ひ、突然御厄介に參上いたし、ほんとうにあつかまじき段、偏へに御ゆるしの程御願申上げます。親の心子知らずで、今日まで随分私共も、お念佛の尊い事、如來の御慈悲といふ事をきかせては居りましたが、いまだ今日まで私共の力足らずして眞に生きるの道を知らせる事が出来ませんでした、誠に私共の願が如來様に通じたので御座いませうか、此度こそ救つて頂く事が出来まして、私達の歎びが何卒御與豫御察し下さいませ。(後略)

定例一部十錢 半年六十錢 一年一圓  
振替口座東京四七二八八番 眞生社  
東京市芝區芝公園第十四號地九番  
編輯兼 土屋 觀道  
發行人  
名古屋市東區東外堀町二ノ二  
印刷人 佐藤 忠義  
東京市芝區芝公園第十四號地九番  
發行所 眞 生 社

(大正十四年八月十三日) 昭和二年二月十六日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 本號十七日發行 第六號第三號  
(第三種郵便物認可) 昭和二年二月十七日發行